

寄贈図書リスト

- ① 電波天文学入門, 高桑繁久, 菊判, 224ページ, 3,800円+税, 森北出版
- ② 新天文学ライブラリー第3巻 ブラックホール天
- ③ 文学, 嶺重慎, A5判, 304ページ, 3,300円+税, 日本評論社
- ④ 星の文化史 世界13地域における星の知識・伝承・信仰, 後藤明, A5判, 254ページ, 4,500円+税, 丸善出版

月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日に締切り, 翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。ご投稿いただいた記事は, 翌月初旬に一度校正をお願いいたします。

記事の投稿は, e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp宛にお送りください。折り返し, 受領の連絡をいたします。

賞の推薦

2026年度の島津賞・島津奨励賞の推薦募集

1. 島津賞候補者の推薦(学会推薦)

科学技術, 主として科学計測に係る領域で, 基礎的研究および応用・実用化研究において, 著しい成果をあげた功労者を表彰します。

本年度表彰件数は1件, 賞状, 賞牌, 副賞500万円を贈呈。

2. 島津奨励賞候補者の推薦(学会推薦)

科学技術, 主として科学計測に係る領域で, 基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ, かつその研究の発展が期待される, 当該事業年度の4月1日時点で45歳以下の研究者を表彰します。

本年度の表彰件数は4件以下, 賞状, トロフィ, 副賞100万円を贈呈。

■推薦要領・応募方法

学会からの推薦件数に制限はありません。推薦は, 研究者個人を対象とし, 連名や研究グループに対する推薦は受理しません。また, 推薦業績は候補者1人に対し1件に限ります。

各推薦/募集要領及び推薦(申請)書類は, 以下のURLよりダウンロードしてください。

<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/>

※各エクセル様式鏡書冒頭の推薦者情報は, 「区分1: 学会」「区分2: 物理関係」「推薦者: 日本天文学会会長」を選択してください。

※候補者(他薦の場合は応募者)は日本天文学会の会員に限らせていただきます。

※学会審査の公平を期すため, 上記締め切り後の書類の提出・追加・差替は受け付けません。

■募集締切

いずれの推薦も2026年7月10日(金)までに推薦書ファイル一式をメール添付にて日本天文学会事務局長宛(jimuchou@asj.or.jp)に送付してください。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
公益財団法人 島津科学技術振興財団 事務局
TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241
URL: <https://www.shimadzu.co.jp/ssf>
E-mail: [admin\[at\]jssf2012.onmicrosoft.com](mailto:admin[at]jssf2012.onmicrosoft.com)

第43回(2026年度)井上学術賞受賞候補者の募集

〈対象〉

自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた50歳未満*の研究者

*2026年9月20日現在

〈助成金額及び採択数〉

賞状及び金メダル, 副賞200万円。5件以内。

〈推薦要項〉

推薦要項および推薦書の書式は下記サイトをご覧ください。

<https://www.inoue-zaidan.or.jp/f-01.html>

〈締切〉

学会締切: 2026年8月27日(木)

〈提出書類・提出先〉

推薦書(WORDとPDFの両方で)および主要文献(5編以内, PDFで)のファイル一式を添付(またはダウンロード情報を記載)したメールを学会事務局長(jimuchou@asj.or.jp)宛に送付してください。

・推薦書冒頭の日付及び推薦者の欄は推薦決定後事務局にて追記しますので, 空欄のままで結構です。

・学会へのご応募は自薦・他薦を問いませんが, 他薦

の場合は候補者了承のうえご応募ください。

- ・候補者は（他薦の場合は応募者も）日本天文学会会員に限らせていただきます。
- ・学会審査の公平を期すため、上記学会締切後の応募者による書類の提出・追加・差替は受け付けませんので、不備の無いようご留意願います。

〈問い合わせ先〉

賞に関する問い合わせ：

公益財団法人井上科学振興財団

TEL：03-3477-2738

e-mail：inoue-ap[at]inoue-zaidan.or.jp)

学会推薦関係：

学会事務長（jimuchou[at]asj.or.jp）

研究助成

2026年度島津科学技術振興財団 研究開発助成の募集

「主として科学計測に係る科学技術領域全般」と「新分野」として当財団が定めた領域で、独創的研究を対象として、申請時点で国内の研究機関に所属する、当該事業年度の4月1日時点で45歳以下の研究者に助成します。

○「主として科学計測に係る科学技術領域全般」

助成金総額：20件、1件につき100万円

○「新分野」

助成金総額：3件以下、1件につき100万円

2026年度は、「先進情報技術の研究分野、または先進情報技術やデータサイエンスを用いて科学的課題解決を目指す研究分野」における独創的研究を対象に助成します。

■応募方法

学会推薦は不要です。必要書類一式を当財団ホームページよりダウンロードして提出してください。

島津科学技術振興財団 研究開発助成公募情報：
<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/grants/apply.html>

■応募締切

「2026年7月31日(金) 17:00」までに島津科学技術振興財団指定の書類提出サイトへ提出。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地

公益財団法人 島津科学技術振興財団 事務局

TEL：(075)823-3240 FAX：(075)823-3241

URL：<https://www.shimadzu.co.jp/SSF>

E-mail：ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

会務案内

日本天文学会 2026 春季年会報告

2026年春季年会は、3月4日(水) から7日(土)までの4日間、京都産業大学神山キャンパス（京都市、ホスト：京都産業大学・京都大学）にて開催された。遠隔地から参加していただけるように、現地およびオンライン（ベストエフォート）のハイブリッド開催であった。講演は現地で行っていただくことを原則としたが、子育てや介護など特別の理由がある場合はオンライン講演も受け付けた。年会参加者数は、会員1,023名、非会員112名の計1,135名（うち現地参加者は930名）であった。講演件数は、口頭講演（a）が487件、ポスター講演（b, c）が139件の計626件であった。3件の企画セッションと、天文教育フォーラム、特別セッション（天文学白書）、および受賞記念講演も開催された。開催地である京都産業大学・京都大学および参加者の皆様のご理解とご協力により、有効な年会とすることができた。参加者・関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。座長は次頁の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する（敬称略）。

〈記者会見〉

日本天文学会2026年春季年会記者会見は、2026年3月3日(火) 13:00から、オンライン形式にて開催された。冒頭では、太田会長による挨拶に続き、日本天文学会の組織・活動概要の説明、本春季年会の紹介、各賞の概要および受賞対象の紹介などが行われた。その後、太田会長の司会・進行のもと、天文教育普及賞の授賞理由および日本天文遺産の認定についての報告がなされた。当日は、報道機関から7名、その他の関係者1名の参加があった。日本天文遺産の認定を中心に、全国紙・地方紙（オンライン版を含む）やウェブメディアにおける報道、関係機関のホームページでの紹介が幅広く行われたことを確認している。

第8回（2025年度）天文教育普及賞（3件）

「東山正宜（ひがしやままさのぶ）・朝日新聞デジタル企画報道部」

「公益財団法人 倉敷天文台」

「茶木恵子（ちゃきけいこ）」

井上毅（天文教育普及賞選考委員会委員）

| | 3月4日(水) | 3月5日(木) | | 3月6日(金) | | 3月7日(土) |
|---|---|---|--------------------------------|---|---|--------------------------------|
| | 13:00-15:10 | 09:30-11:40 | 13:00-15:10 | 09:30-11:40 | 13:00-15:10 | 09:30-11:40 |
| A | Z3. 全天偏光マップ 松村知岳 (東京大学) | U. 宇宙論 石川将吾 (日本大学) | U. 宇宙論 戸田陽 (高知工科大学) | R. 銀河 齊藤俊貴 (静岡大学) | R. 銀河 徳田一起 (香川大学) | |
| B | V2. 観測機器 米田謙大 (東京農工大学) | V2. 観測機器 秋田谷洋 (千葉工業大学) | V2. 観測機器 美濃和陽典 (国立天文台) | V2. 観測機器 鹿野良平 (国立天文台) | V2. 観測機器 秋山正幸 (東北大学) | |
| C | T. 銀河団 赤堀卓也 (国立天文台) | Q. 星間現象 柘植紀節 (岐阜大学) | Q. 星間現象 川中宣太 (東京都立大学) | Q. 星間現象 鈴木寛大 (宮崎大学) | Q. 星間現象 霜田治朗 (東京大学) | |
| D | Z2. ペバトロン 田中孝明 (甲南大学) | Z2. ペバトロン 齋藤隆之 (東京大学) | Z2. ペバトロン 井上剛志 (甲南大学) | Z1. 天文学史 富田晃彦 (和歌山大学) | Z1. 天文学史 玉澤春史 (東京大学/ 京都市立芸術大学) | |
| E | Y. 教育・広報・他 日下部展彦 (自然科学研究機構) | Y. 教育・広報・他 福田尚也 (岡山理科大学) | N. 恒星・恒星進化 谷口大輔 (東京都立大学) | N. 恒星・恒星進化 藤林翔 (東北大学) | N. 恒星・恒星進化 高田将郎 (東京大学) | N. 恒星・恒星進化 澤田涼 (東京大学) |
| F | M. 太陽 増田智 (名古屋大学) | M. 太陽 西塚直人 (情報通信研究機構) | M. 太陽 下条圭美 (国立天文台) | V1. 観測機器 新沼浩太郎 (山口大学) | V1. 観測機器 米倉覚則 (茨城大学) | V1. 観測機器 井口聖 (国立天文台) |
| G | V3. 観測機器 高橋弘充 (広島大学) | V3. 観測機器 野田博文 (東北大学) | V3. 観測機器 信川久実子 (近畿大学) | S. 活動銀河核 萩原喜昭 (東洋大学) | S. 活動銀河核 和田桂一 (鹿児島大学) | S. 活動銀河核 三澤透 (信州大学) |
| H | X. 銀河形成・進化 磯部優樹 (Cambridge University) | X. 銀河形成・進化 内山久和 (法政大学) | X. 銀河形成・進化 堀内貴史 (東京大学) | X. 銀河形成・進化 仲里佑利奈 (Flatiron Institute) | X. 銀河形成・進化 村田一心 (神奈川工科大学) | X. 銀河形成・進化 道山知成 (周南公立大学) |
| I | W. コンパクト天体 谷川衝 (福井県立大学) | W. コンパクト天体 志達めぐみ (愛媛大学) | W. コンパクト天体 小林翔悟 (立教大学) | W. コンパクト天体 川島朋尚 (一関工業高等専門 学校) | W. コンパクト天体 木村成生 (東北大学) | |
| J | P2. 原始惑星系円盤 高棹真介 (武蔵野美術大学) | P2. 原始惑星系円盤/ P1. 星形成 深川美里 (東北大学) | P1. 星形成 小林将人 (核融合科学研究所) | P1. 星形成 細川隆史 (京都大学) | P3. 惑星系 吉川真 (宇宙航空研究開発 機構) | P3. 惑星系 川島由依 (京都大学) |

第8回(2025年度)日本天文遺産(2件)
「星座右と陸奥州気仙郡唐丹村測量之碑(岩手県釜石市)」
「上松赤外線望遠鏡(兵庫県佐用郡佐用町)」
松尾厚(日本天文遺産選考委員会委員長)
(深川美里)

〈企画セッション〉

「天文学史研究の拡大と展望: Cultural Astronomy としての天文と歴史」
世話人: 玉澤春史(東京大学/京都市立芸術大学),
松浦清(大阪工業大学), 真貝寿明(大阪工業大学),
澤田幸輝(沖縄女子短期大学)

2026年3月6日に京都産業大学で開催された日本天文学会2026年春季年会において, 企画セッションZ1

「天文学史研究の拡大と展望: Cultural Astronomy としての天文と歴史」を開催した。本セッションは, 天文学史研究および文化天文学(Cultural Astronomy)の視点から, 天文学と社会・文化との関係を多角的に検討することを目的として企画されたものである。

近年, 国際天文学連合においても文化天文学や天文学史に関する研究が活発化しており, 民族学や考古学の視点から天文を捉えるセッションや天文文化遺産などを扱う国際シンポジウムが継続的に開催されている。国内においても科研費にて天文と歴史・文化を横断するような学際連携研究のプロジェクトが複数実施されるなど近年活発化している。天文学を自然科学としてだけでなく, 人間社会の文化的営みとして捉える研究は, 考古学・文化人類学・歴史学などの学際領域として発展しており, 本セッションもそのような国内外の研究動向を背景として企画された。

本セッションでは、歴史資料に残された天文記録の分析、星名や星座に関する文化的研究、天文現象に対する民俗的解釈、天文学研究の歴史や市民活動との関係など、多様なテーマの研究発表が行われた。

招待講演として、中野真備氏および馬場幸栄氏による講演が行われた。中野氏の講演では、流星や彗星などに関する民俗伝承を対象に、市町村誌から各地に残る言い伝えや占兆の事例を整理し、流星が天候の予兆や吉凶の兆しとして解釈されてきたこと、また願い事を唱えるといった行為や身体動作を伴う対応など、人々が天文現象に意味を見出してきた民俗的価値が紹介された。

一方、馬場氏の講演では、近代日本の天文学研究を支えた水沢緯度観測所を題材として、ガラス乾板写真のデジタル化と史資料調査を通じて、当時の観測活動や研究体制の実態を再構成する研究が紹介された。同観測所では多くの女性所員が計算作業や観測記録の整理、ガラス乾板写真の管理などを担い、国際緯度観測事業などの研究を支えていたことが示され、近代天文学史における女性の役割を再評価する視点が提示された。また、観測資料として残されたガラス乾板が、天文学史研究の重要な史料となる可能性についても示された。

この他にも、星座体系の比較研究、市民科学や教育との関係を扱う発表などが行われ、天文学と社会・文化の関係を多角的に捉える研究が紹介された。各発表に対する質疑応答も活発であり、オンラインも含め聴講者も多く、自然科学分野の研究者がメインである天文学会の会員にも本セッションの内容に対する関心の高さがうかがえた。本企画セッションを通して、天文学史および文化天文学が、自然科学としての天文学と人文学ならびに社会科学を結びつける学際的研究領域として重要な役割を持つことが改めて確認された。活発な質疑応答の議論を踏まえると、天文学史および文化天文学との呼称が、それらの英文表記も含め、この研究領域を差す呼称として最適であるかどうか議論の余地もありそうだが、今後このような研究交流の場を通じて、天文と文化の関係を探る研究がさらに発展していくことが期待される。

「PeV宇宙線加速器ペバトロン探査の現状と今後の展望」

世話人：辻直美（東京大学宇宙線研究所）、田中孝明（甲南大学）、井上剛志（甲南大学）、齋藤隆之（東京大学宇宙線研究所）、佐野栄俊（岐阜大学）

近年の空気シャワー実験の発展により、(サブ) PeVガンマ線天文学が幕を開けた。PeVに迫るガンマ線の観測が可能になったことで、PeVものエネルギーを持つ宇宙線の加速器「ペバトロン」の正体の解明に迫ることができる。銀河宇宙線の起源天体として、以前か

ら挙げられてきた超新星残骸やパルサー星雲に加えて、大質量星団やマイクロクエーサーといった新しい種類のペバトロン候補天体が注目されている。これらの天体はガンマ線コミュニティでは大きな関心を集めている一方で、電波やX線といった他波長での観測が不十分なものも多く、多波長観測の重要性が一層高まっている。また、大質量星団やマイクロクエーサーにおける粒子加速のメカニズムも良く分かっておらず、観測と理論の両面からガンマ線放射や粒子加速の起源に迫ることが重要である。さらに2023年にはIceCube実験によって銀河面ニュートリノ放射が検出され、ペバトロン研究との強いシナジーが期待されている。加えて、これまで北天が中心だったガンマ線観測も、CTAO-North/South, ALPACA, SWGOといった実験の計画・建設が進んでおり、南天も含めた全天でのペバトロン候補天体の探査・観測が始まろうとしている。こういった背景のなか、日本のコミュニティとしてペバトロンの研究に貢献できることがあるのではないかと考え、本セッションを企画することとなった。

本企画セッションは2日間に渡る計6時間のセッションで、基調講演6件、一般講演19件の講演が行われた（うちa講演が15件、b講演が4件）。基調講演としては、IHEPのDmitry Khangulyan氏のLHAASOによる最新のガンマ線観測のレビュー（講演タイトル「Galactic PeVatrons Found in Gamma-Rays with LHAASO」）から始まり、Columbia UniversityのKaya Mori氏によるX線観測の現状「Highlighting recent X-ray observations of Galactic PeVatrons」、岐阜大学の佐野栄俊氏による電波観測の概要（「PeVatron候補天体に付随する星間雲の精査」）の講演があり、電波からガンマ線に渡る多波長観測の最新結果をカバーした。加えて、東京大学宇宙線研究所のMarcel Strzys氏による次世代ガンマ線望遠鏡CTAOの現状と展望（「Identifying Galactic PeVatrons — current status and the role of Imaging Air Cherenkov Telescopes」）、塔隆志氏による南北両半球での空気シャワー実験の将来計画（「Tibet/ALPACA空気シャワー実験による南北両半球でのペバトロン探査」）、東北大学の木村成生氏による理論研究のレビュー（「Theoretical Models for Galactic PeVatrons」）についての講演を設け、今後の展望や理論研究への理解も深めることができた。一般講演でも、電波、X線、ガンマ線、理論、観測装置といった幅広い分野からの報告があり、当初目的としていた通常セッションの垣根を超えた発表や議論を行うことができた。天体別に一般講演を見ると、マイクロクエーサーに関する講演申し込みがもっとも多く、初日に2時間のマイクロクエーサーセッションを設ける

ことができるほどで、皆さんの注目の高さが伺えた。

一般講演の応募数は想定を超え、何件かは通常セッションやb講演に回って頂かなければならなかった。当日も現地に40人ほど、zoomで20-30人ほどの参加者があり、盛況であった。質疑応答や議論の時間では、座長が促すまでもなく自然と参加者から質問が出て、活発な議論が行われた。

ガンマ線や宇宙線の分野はどうしても欧米が主流である一方で、日本でも引けを取らないほどの企画セッションを開催できたことを嬉しく思います。このような貴重な機会をいただき、世話人一同心より感謝申し上げます。

「全天多周波数帯ミリ波・サブミリ波偏光マップ観測がもたらす天文学の新たな知見」

世話人：松村知岳（東大Kavli IPMU）、市来淨與（名古屋大学）、藤本龍一（JAXA）

本企画セッションは、次世代衛星による宇宙マイクロ波背景放射（CMB）の全天偏光観測がインフレーション仮説の検証を主たる動機として推進されている現状を踏まえつつ、精密な全天多周波数帯偏光マップがより広範な宇宙物理学に対しても重要な科学的価値を有することを再認識することを目的として企画された。実際、欧州宇宙機関Planck衛星の成果が示すように、全天偏光観測は星間ダストや銀河磁場構造の理解をはじめとする多様な研究分野に寄与してきた。本セッションでは、ミリ波・サブミリ波帯における全天偏光観測を基盤として、CMB、星間ダスト、星形成領域に関する研究、および可視偏光サーベイとの連携を含む幅広い話題について議論を行った。とりわけ、Planck衛星による成果を踏まえた全天偏光マップの科学的意義と、LiteBIRDに代表される次世代観測計画の展開が主要な論点となった。本セッションは2時間枠で企画し、キーノート講演1件に加えて6件の一般講演の申し込みがあった。参加者は会場約28名、オンライン約11名であった。

まず、キーノート講演としてFrançois Boulanger氏（École Normale Supérieure）が、Planck衛星が観測した30 GHzから353 GHzの全天偏光マップ、さらには無偏光成分まで含めると545 GHzと857 GHzの全天温度揺らぎマップにより天体物理学への貢献について総括した。特に高精度偏光マップにより星間ダスト成分の理解、そこから銀河磁場構造の理解が進展したこと、さらにはサブミリ波・赤外帯域による中性水素やCO輝線観測を含むダスト分布、また可視光帯域の偏光マップとの相関により多波長解析が可能となり多

様な理解が進んだ。さらには、CMB偏光解析における前景放射の重要性が明確化されたことが示された。

続いて、石野宏和氏（岡山大学）よりLiteBIRD計画の概要と科学目標が報告され、原始重力波起源のBモード偏光検出に向けた観測設計および系統誤差制御の取り組みが紹介された。次に、梨本真志氏（新居浜高専）は、全天ミリ波・サブミリ波偏光マップに基づくダスト物理の新展開について述べ、ダスト粒子の配向や磁場との相互作用に関する新たな制約の可能性を指摘した。さらに、川端弘治氏（広島大学）は可視偏光サーベイSGMAPの進展と国際共同観測との連携について報告し、異なる波長帯の偏光データ統合による銀河磁場およびダスト構造の多階層的理解の重要性を示した。続いて、古屋玲氏（徳島大学）は、450/850 μm 帯偏光観測に基づく星形成領域の研究について報告し、ダスト特性および磁場構造の波長依存的解析の有効性を示した。その後、Hanchun Jiang氏（東京大学）は、LiteBIRDの観測精度向上に向けたdelensing手法の最適化について報告し、重力レンズ効果の低減による原始重力波制限の改善可能性を定量的に示した。最後に、直川史寛氏（東京大学）は多波長電波観測に基づく宇宙複屈折の検証について報告し、CMB偏光回転に対する独立かつ相補的な観測的制約の重要性を指摘した。

以上の講演を通じて、全天多周波数帯偏光マップは、宇宙初期物理、銀河磁場、星形成過程、さらにはダスト物性や新物理探索に至るまで、多分野を横断する基盤データとしての役割を担うことが再確認された。特に、異なる波長帯・観測手法の統合的解析の重要性と、LiteBIRDをはじめとする将来計画への期待が共有された。短いセッションではあったが活発な議論が行われ、全天偏光観測の現状と将来展望を整理する上で有意義な機会となった。講演者と参加者の皆様には、世話人一同心より感謝申し上げます。

〈特別セッション〉

「みんなで天文学の未来を語ろう！第4回」

世話人：天文学白書委員会第1期委員

赤堀卓也（国立天文台）、石川遼子（国立天文台）、岡本桜子（国立天文台）、鴈野重之（九州産業大学）、河原 創（JAXA/宇宙科学研究所）、高橋慶太郎（熊本大学・委員長）、田中雅臣（東北大学）、富田賢吾（東北大学）、野田浩司（千葉大学）、野田博文（東北大学）、米徳大輔（金沢大学）

年会最終日の3月7日（土）13:00-15:00に天文学白書に関する特別セッションがハイブリッド形式で開催されました。第4回目となる今回は、近年大きな成果を

あげている JWST による遠方銀河研究を取り上げ、2人の講演者にその到達点と今後の方向性について語っていただきました。参加者の人数は現地が約30名、オンラインが約30名と多くの方に参加していただきました。

本セッションではまず天文学白書委員会の趣旨が改めて説明されました。この事業は日本天文学会が波長横断・分野横断で天文学全体について楽しく語り合う場を作って天文学コミュニティを盛り上げていくこと、そしてコミュニティの夢を白書としてまとめることを主な目的としています。詳しくは天文月報2025年2月号の記事をご参照ください。また、ここ数ヶ月で執筆班が確立しつつあり執筆者は60名にも及んでいます。

1つ目の講演は播金優一氏（東京大学）による「遠方銀河研究はどこまで来たのか：JWST から未来へ」で、JWST による最新の遠方銀河研究を踏まえつつ、遠方銀河観測の未来について、期待と夢を語っていただきました。2つ目の講演は長峯健太郎氏（大阪大学）による「JWST 以後の遠方銀河研究：理論は次の30年に何を問うべきか」で、JWST 以後の時代において銀河形成理論がどのように進化するかを展望していただきました。会場からは盛んに質問が出て大いに盛り上がりました。

パネルディスカッションでは講演者と委員により衛星観測の将来展望について議論されました。会場からも活発に意見が出て、「若手からどんどんアイデアを出してほしい」という声があった一方で、「アイデアを出しても否定されがち」という声もあり、議論が深まりました。

〈天文教育フォーラム〉

会期初日の16時半から18時まで、日本天文教育普及研究会との共催にて天文教育フォーラムが開催された。今回は京都産業大学（天文学会J会場）とオンラインとのハイリッド開催であり、現地とオンラインでそれぞれ約65名、約95名の方にご参加いただいた。

今回のフォーラムのテーマは、「デジタル教材＋生成AI時代の天文教育」であった。GIGA スクール構想のもと、初等・中等教育の現場ではICT端末の1人1台配備が進み、デジタル教科書やオンライン教材、各種学習支援ソフトを活用した授業が急速に広がっている。天文教育においても、シミュレーション、画像・動画データ、オンライン観測など、従来の授業では難しかった学習体験が可能になりつつある。さらに近年は、生成AI技術の急速な進展により、検索や文章生成、要約、画像生成といった機能が日常的に利用できる環境が整いつつある。学習者が疑問を持った際、AIが即座に「答えらしきもの」を提示する状況は、もはや特別なものではなく、デジタルネイティブ世代にとって当たり前の学習環境になりつつある。こ

のような環境は天文教育に新たな可能性をもたらす一方、情報の正確性の判断、思考過程の可視化、探究的学習の設計、教師の役割の変化など、これまでとは異なる課題も投げかけている。生成AIを「答えを与える存在」としてではなく、思考を深めるための補助的なツールとしてどのように活用するかは、教育現場だけでなく研究者にとっても重要な論点である。

今回の天文教育フォーラムでは、デジタル教材や生成AIを活用した天文教育の現状について、学校現場・AI教材開発の立場から話題提供を行うとともに、パネルディスカッションを通して、デジタル教材と生成AIが共存する時代における天文教育のあり方や、今後の展望について議論を行う場として、今回のテーマが設定された。

今回は話題提供として、立教大学の加藤恒彦氏と、松坂市立米ノ庄小学校の前田昌志氏を招待講師としてお招きし、それぞれの教育現場における生成AI利用の現状についてご紹介いただき、さらにパネルディスカッションでは金沢大学付属高等学校の渡會兼也氏を加え高等学校からの視点も交え、会場からも質問を受けつつ活発に議論された。まず、テキスト生成AI（大規模言語モデル：LLM）の近年の進展について紹介された。物理学・化学・生物学の大学院レベルの4択問題をういた指標によると、大学博士課程相当レベルの正答率に達しているという結果もあり、次期学習指導要領の議論において、情報活用能力育成のための教育内容を体系的・抜本的に充実する方向性が指摘されている。一方で、画像生成や動画生成においてはまだ課題が残る状況が紹介された。そのような中、小学校の現場で生成AIによる画像のどこがおかしいかを問うことで授業に応用し、生成AIの使い方と合わせて授業の現場に活用している例が紹介された。ただし、急速に発展する技術とともに、数年のうちに解消されるだろうという議論もなされた。そのため、同じ授業実践がいつまで使えるかは探りの状態であり、学校現場においても日々進化する生成AIに合わせ、技術と時代の変化に対応する教師の学びが重要であることが共有された。

教育関係者や研究者においても、AIを活用している方は多いことと思う。本フォーラムが、今後も進化が続く生成AI時代において、それぞれの現場の中でAIを活用するための一助となれば幸いである。

〈受賞記念講演会〉

年会2日目の3月5日（木）の16:30から開催された会員全体集会で、2025年度の日本天文学会林忠四郎賞、欧文研究報告論文賞、研究奨励賞、天体発見賞、天体発見功労賞、天文功労賞、天文教育普及賞の授賞

式が行なわれた。また、続く18:00からは林忠四郎賞と研究奨励賞の受賞記念講演会が行なわれた。受賞記念講演における講演者（敬称略）と講演タイトルは以下の通りである。

林忠四郎賞受賞記念講演

大向一行（東北大学）「宇宙初期天体形成理論の進展」

研究奨励賞受賞記念講演

尾上匡房（早稲田大学）「すばるとJWSTで追う、超巨大ブラックホールの初期成長と母銀河進化」
 鄭昇明（MPA）「宇宙初期における低金属度星の初期質量関数の進化に関する理論的研究」
 行方宏介（京都大学）「多波長観測と太陽・恒星の比較による恒星スーパーフレアとコロナ質量放出の理解」

研究奨励賞の3氏による講演は、いずれも近年の天文学の潮流を生み出してきた力とフレッシュさに溢れたものであり、さらなる若手世代である学生やポスドクに向けた明るいメッセージも込められていた。大向氏による林忠四郎受賞記念講演は、氏の長年にわたる（そしてそれは成功あり失敗ありの山あり谷ありの努力の軌跡でもある）初代星・初代ブラックホール形成の理論的研究の歴史を振り返るものであり、過去から現在に続く様々な人々との交流エピソードとともに、しばしば会場に大笑いを巻き起こしながら進められた。粘り強く、ユニークな研究を続けることの醍醐味を感じられる講演で、参加者一同おおいに刺激を受けた。なお、欧文研究報告賞は、Yajima et al. 2021, PASJ, 73, 257 と Akino et al. 2022, PASJ, 74, 175 の2編に授与された。受賞記念講演は2026年度の秋季年会で開催される予定である。

〈公開講演会〉

日本天文学会第76回公開講演会は、2026年3月8日（日）13:30から16:00まで、京都産業大学むすびわざ館ホールにおいて京都産業大学共催で開催された。「重力と天文学—マルチスケールで暗躍する宇宙の力—」をテーマに、佐藤浩介氏（京都産業大学教授）による「XRISMが切り拓く躍動する宇宙像」、上田佳宏氏（京都大学教授）による「XRISMで解き明かす超大質量ブラックホールの謎」、野村英子氏（国立天文台教授）による「惑星の重力が明らかにする惑星形成の現場」の3講演が行われた。これら3つの空間スケールにわたる講演で、XRISMやALMAなどの最新の観測結果や理論シミュレーションの結果が紹介された。80名の参加者があり、各講演後および最後の全体質疑の時間には、

「XRISMは打ち上げ前に全ての科学観測計画が決まっていたのか」「ベテルギウスは爆発しないということか」「ホットジュピターはどうしてスノーラインのあんなに内側にいるのか」など、多くの質問が寄せられ、一般の方々の天文学に対する深い関心が感じられる講演会となった。司会は岸本真（京都産業大学）が務めた。

（岸本真）

〈懇親会〉

年会3日目の3月6日（金）18:00より、フィエスタ河原町にて懇親会を行った。天文学会の会場から公共交通機関を乗り継いで行かないといけない場所にもかかわらず、224名（うち学生94名）も参加していただいたことに感謝したい。フィエスタ河原町側から人数の変更の受付は前日までと言われており、懇親会当日に数名の方から参加の打診をいただいたものの、断らざるをえなかったのは心苦しかった。

参加受付には、これまでと違いPeatixというシステムを使用した（前々回と前はイベントベイ）。事前にスマホにアプリを入れていただいて決済すれば、受付ではアプリ上のボタンを押すだけで受付が完了するので、受付はスムーズに行えた。バックアップとして参加申込者リストを印刷して、受付で名前を言ってもらおうということでも対応したが、かなりの割合でアプリでの受付をしていただけた。ただ、今回の申込のためだけにPeatixでアカウント登録をするのには抵抗があったという声もいただき、申し訳なかった。次回以降の受付は継続性を考えていただくのがよいかもしれない。

懇親会は野上大作が進行を担当し、太田耕司・天文学会会長の挨拶及び乾杯の音頭により始まった。ただし、年会会場から離れていて到着時間がバラけることが予想されていたため、17:30から飲み物の提供をしており、乾杯の音頭のときには既に2杯目を飲んでいる方もそれなりにおられたと思う。物価高騰の折、会費を抑えるために、特に余興や特別な料理や飲料は用意しなかったが、存分に食事と会話を楽しんだという声を多くいただいたのは幸いだった。人数に比してやや会場が狭かったかなという気もしていたが、参加者同士の距離が近めだったのも懇親会としては良かったのかもしれない。最後は米原厚憲・京都産業大学開催地理事と本田充彦・岡山理科大学次回開催地理事の挨拶をもって、20:00に締めとなった。

参加していただいた方々には感謝を申し上げる。今回の懇親会が、世代や分野、立場を超えて親睦を深め、新たな研究の種となる議論が生まれるきっかけとなっていれば幸いである。

末筆ながら、リーズナブルな料金でよい会場（京都

の夜景を楽しめるテラスもあった)と飲食物を提供していただいた(予定になかった量の料理をその場の判断で追加で提供していただいたそうだ)フィエスタ河原町の方々にも感謝を申し上げます。

(野上大作・米原厚憲)

〈保育室〉

京都産業大学 神山ホール3階・第3セミナー室にて、保育室を開設した。本年会では1家族2名が保育室を利用した。保育室の準備にあたり、京都産業大学スタッフの方々に様々なご協力をいただいたことを感謝する。

(年会実行委員長 和泉突)

〈ジュニアセッション〉

第28回ジュニアセッションを、春季年会最終日の3月7日(土)に、現地とオンラインでのハイブリッド形式で開催した。発表数は69件、そのうち現地会場での発表が42件であった。参加者数は、現地会場が発表者生徒142名、指導者38名に加え、保護者や教育関係者などの一般の参加者、運営関係者合わせて270名であった。オンライン参加者は、発表関係者が25接続、その他が55接続であった。これに加えて、年会参加の研究者が数10名参加しており、全体として約390名がセッションに参加したことになる。発表数がここ数年では最大であった一方、期末試験など学校行事が行われている3月第1週の開催だったことで、対面での参加者が大きく減少した。

セッションは太田会長の挨拶に始まり、午前、午後それぞれ約2時間の口頭発表セッションを行った。午前中が山岸光義(東京大学)、鈴木文二(渋谷教育学園幕張中学校高等学校)、午後が 秦和弘(名古屋市立大学)、可長清美(東京都立川高等学校)の各氏にお願いした。例年通り口頭発表の希望が多く、1件あたりの発表時間は3分(現地)ないし4分(オンライン事前収録)だったが、各発表者は研究の要点をうまくまとめて発表し、座長の的確な進行も相まって午前・午後とも大きな遅延なく進められた。昼の時間帯と午後の口頭セッション終了後に、現地会場ではポスターセッションを行い、年会参加の研究者も含めて熱気あふれる活発な議論が行われた。ジュニアセッションでは、口頭発表の有無にかかわらずすべての発表がポスターセッションに参加することが基本で、現地参加できなかった発表はホームページ上にPDFを掲示し、コメントを収集して発表者に送付することとしている。また、今年も、タイの高校生から7件の発表があった。いずれもレベルの高い研究であったが、オンラインによる発表だったため、議論・交流が深められ

なかったことは残念であった。

前述の通り、開催時期が例年より早く学校行事との関係もあり、十分な研究時間がとれないのではないかと憂慮していたが、多くの発表は完成度が高く、あるいは当日の議論でさらに発展の可能性が見えてくるものであった。発表者の生徒の皆さん、また研究指導者の皆さんの努力がうかがえる。これらの意欲の高い生徒さんたちが、研究の楽しさ、厳しさを経験し、将来に活かしていけるよう、天文学会に所属する研究者の議論への参加をお願いしたい。

事後に行った参加者アンケートでは、良い経験になったという感想に加え例年にも増して運営上の改善点・要望を伝える意見があった。これは、参加者がジュニアセッションの意義を評価し、さらに良いものにしていきたいという気持ちの表れと思う。さまざまな制約からすべてに答えることはできないものの、ジュニアセッション実行委員会では、これらの声に耳を傾け、より充実したジュニアセッションの実施に向けて努力していきたい。

最後になったが、ジュニアセッション固有の要望に応えていただいた開催地関係者の皆様、予稿や発表資料の確認、前日の準備から当日の運営を手分けして行った実行委員会・世話人メンバーには改めて感謝したい。本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会が共催、日本学術会議が後援した。参加者およびご協力いただいた関係各位に御礼申し上げます。

(ジュニアセッション実行委員長 山村一誠)

入会・移籍・退会のお知らせ

2026年3月2日に開催された公益社団法人日本天文学会理事会において、正式に入会・移籍が承認された方、退会が報告された方の人数をお知らせします。

入会 正会員：22名 準会員：2名
2026年度入会 準会員：2名
退会 正会員：3名 準会員：14名
移籍 2026年度から 準→正：3名 正→準：14名

2027年度 日本天文学会「国内研修支援金」の公募

〈募集要項〉

応募資格：応募時点で日本天文学会会員であること

(内規第3条)

募集人数：若干名

研修期間：2027年4月から2028年3月までの12カ月のうち希望する期間

- ・受入機関、指導教員〔受入研究者〕と相談の上で決めていただきます
- ・研究終了後、2カ月以内に研究報告書を提出していただきます

支給額：総額25万円以下（2027年4月支給予定）

申し込み：応募申請書に必要な事項を記入し、電子ファイルをEメールで送付してください。郵送の場合は、国立天文台内「日本天文学会事務長」宛てに紙面を送付してください。

送付先：日本天文学会 事務長

住所：〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1

国立天文台内

e-mail: jimucho[at]asj.or.jp

応募締切：2026年8月31日(月) 必着

審査：国内研修支援金選考委員会（内規第5条）で審査し、10月中旬までに通知いたします。

申請用紙：学会ホームページからダウンロードいただくか、日本天文学会事務所（jimucho[at]asj.or.jp）までご請求ください。

<https://www.asj.or.jp/jp/activities/expenses/kensyu/>

（申請書の書き方例もご参照ください）

成果の発表：研修期間終了後2ヶ月以内に「研修成果報告書」を提出していただきます（「天文月報」に掲載されます）。また、天文学会年会において研究報告（発表）を行うことを推奨します。

なお、国内研修支援金に関する内規は天文学会ホームページの「定款・細則・内規」に掲載されています。

<https://www.asj.or.jp/jp/about/articles/#naichi>

問い合わせ先：

国内研修支援金選考委員会（委員長：高妻真次郎）

kokunai-kenshu@asj.or.jp

編集委員会より

天文月報記事投稿用アップローダー

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_submission/

■ログイン

ユーザー名とパスワードが必要です。ホームページにある「お問い合わせフォーム」からお問い合わせください。

■アップロードの仕方

- ・アップロード画面で必要事項を埋めてください。するとアップロードに進むことができます。
- ・できる限りファイルは1つにまとめてください。
- ・ファイルが複数ある場合は「複数のファイルを投稿する」ボタンを押してください。押すたびに欄が増えます。
- ・1回あたり全部で最大50 Mbyteまで、個数は20個まで送信できます。それ以上の巨大なファイルのアップロードは推奨されませんが、やむをえない場合は分割してお送りください。

■注意

投稿者の個人の認証はcookieを利用しています。

したがってcookieを受け取らないブラウザでは使えません。またフォームのチェックや可変個数のアップロードボックスはjavascriptを利用していますのでjavascriptが使えなければこのアップローダーは使えません。その場合はtoukou@geppou.asj.or.jpまでメールでご投稿ください。

■連絡先

アップローダーに関するご質問はtoukou@geppou.asj.or.jpまでお願いします。

（天文月報編集長）

天文月報記事ご執筆用テンプレート

SKYLIGHT, EUREKA, 天球儀などのご執筆にあたりましては、日本天文学会HP内「天文月報」のページにあります「投稿用テンプレート」をご活用ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_template/

TeX・LaTeXで執筆される方はテンプレートをオンライン上またはダウンロードしてご利用ください。

MSWordで執筆される方はwordテンプレートをダウンロードしてご利用ください。

ご執筆の前に必ず「執筆マニュアル」をご一読ください。

https://www.asj.or.jp/jp/activities/geppou/author_manual/

texをご利用される場合は、あわせてreadmeもお読み下さい。

※ご利用にあたって不具合を発見された方は、お手数

をおかけいたしますが、編集委員会までご連絡をお願い申し上げます。

天文月報 119 巻 7 月号 主な掲載予定記事

EUREKA: 輝線で観る銀河進化最盛期の銀河周辺物質【日下部晴香】電子捕獲型超新星の光度曲線と判別方法【佐藤大仁】多波長観測で探る急成長中の超巨大ブラックホール【小淵紗希子】

〈シリーズ〉海外の研究室から: Carnegie Observatory 坊氏と私のアメリカ研究生生活【百瀬莉恵子】

編集委員: 日下部展彦 (編集長), 岡本文典, 小山翔子, 志達めぐみ, 鈴木大介, 高橋葵, 田中壱, 谷川衝, 鳥海森, 中島亜紗美, 信川久実子, 橋本拓也, 福島肇, 藤澤幸太郎, 宮武広直, 宮本祐介, 守屋堯

令和 8 年 5 月 20 日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町 332-6 株式会社 国際文献社

定価 733 円 (本体 667 円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359 (事務所) / 0422-31-5488 (月報) Fax: 0422-31-5487

振込口座: 郵便振替口座 00160-1-13595 日本天文学会

三菱 UFJ 銀行 三鷹支店 (普) 4434400 公益社団法人 日本天文学会

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会 2026 年 (本誌掲載記事は無断転載を禁じます)